

柔らかい日本
あるいは
イシバ内閣に
ワタシ達が夢想する未来

瀬崎 亮子





「いってきまーす」

「あ、ちょっと、悠希（ゆうき）のタオル持ったの？」

「持った持った〜」

ママの声に見送られながら、二歳になった悠希を抱っこして車に乗り込む。

今日は二限からだから楽とはいえ、悠希を預ける時間は決まっているので、ママより先に出る。

私は大学三年生、シングルマザーだ。二十年くらい前までは、そもそも学生で赤ちゃんがいるというだけで眉をひそめるような風潮があった、とママは言うが、今はけっこう当たり前。大学に保育所が併設されているし、学生の子どもがたくさん預けられている。

そもそも大学生といっても、いろんな世代の人がいろんな時間に通ってくるので、昔みたいに「大学生です」と言えば十八歳から二十二歳くらい、という感じでもない。私の同級生も五十歳代の人もいるし、逆に十二歳の天才児みたいな子もいる。それぞれが全く違う視点から意見を述べるので、授業も活気が

ある。

「おはようございますーす」

「あ、中山さん、おはようございます。悠希ちゃん、おはよう」

「おはようーございます」

大学内の保育所の保育士さんも学生が多い。だいたい保育所はそれぞれの職場にあるし、保育士さんのお子さんは優先的に働き先の保育所に入所できるので、ほとんどの保育士さんがご自分のお子さんと一緒に他の子の面倒も見てくれている。ちなみに地域で自営業をしている私の友達は、地域の保育ママに預けていることが多いと言っていた。

私が小さかった頃は、ほんとにたくさんの方が東京とその周辺に住んでいた。大地震がいつ起きてもおかしくないと言われ、出生率が日本で一番低いと言われる東京に、人も企業も日本全国から集まり続けて、東京一極集中はダメだと言われても、ぜんぜん状況は変わらなかった。ママは私の子育て当時は専業主



婦だったが、周りで働いている人は子どもをなかなか保育園に入れられないとかでいろいろ困ったそうだ。

しかしその後、東京近郊から全国への移住がブームになった。まずはIT関係やクリエイターなど、エッジの効いた職業についている人で、東京に住む必要性があまりない人たちが先駆けとなった。彼らの移住によって地域に新しいコミュニティが生まれ、それと同時に企業の地方移転も相次いだ。これは税制で後押しされたものということだけど、当時の若い世代が東京に住むことにあまりこだわりがなくなっていたことも大きかったと聞く。最初に移住した人たちがオシャレなカフェや飲食店、美容院やエステサロンなんかをたくさん作ったので、「東京だけが文化の発信地」というイメージは徐々に薄れていったし、それと同時に学校もどんどん変化して、地方の学校はダメ、東京の大学に入らないと、ということもなくなってきた。むしろ専門的な職業教育などは地方の大学の方が進んでいるので、目的が明確な子ほどめざす大学のある地方に進学するようになった。

地方にいろんなシグニチャーシティができたのもこの頃だ。それぞれの地域で、地元の人を知恵を絞って考えたテーマに沿って、例えば「田園居住グリーンシティ」とか「先端モビリティシティ」、「ハイパー港湾貿易シティ」などなど、なんだかテーマパークみたいに特色のある都市が全国に生まれた。そしてそのコンセプトに共感したり、その中心産業となる企業に勤めたりしている人が、続いて大量に移住した。

私たちは中学校で金融とか簡単な税制とか、起業の基本を習った最初の世代だ。女の子はたいして小学生の時、お花屋さんとかカフェとか、かっこよく言えばマイクロビジネスの起業にあたるような仕事を「将来やりたい仕事」として言うものだが、私たちより前はそれがすぐ実現できることはあまりなかったらしい。今は地域で働きたいと思う子は、高校を卒業してすぐにでも地元で起業できる環境があるので、私の同級生でも地元で花屋さんをやっていたり、カフェを始めたりしている子もいる。

うちのママは東京にいる間にいろいろ考えたようで、結局おじいちゃん、おばあちゃんの住んでいる地方に私と二人で移住した。家は、おじいちゃんたちの家では手狭なので、広い二階建ての空き家を買って、リフォームしてみんなで住めるようにした。

ママはもともと東京でもネイルサロンにパートタイムで勤めていたので、移住を機に地元でサロンを開き、そこそこ好評で今は三店舗を経営している。「これでも社長よ」とことあるごとに言うので笑ってしまうが、東京で専業主婦をやっていた時より楽しそうだ。

パパは変わらず東京で働いているが、月に一度か二度、私たちのところに来て4〜5日いる。ジョブ型雇用、つまり「いつまでにこの仕事を仕上げる」ということだけを決めるようになったので、時間の使い方はかなり自由が利くようになったのだそうだ。もちろんネット環境がとていいので、こっちにいながら東京の仕事をすることもある。最近はややくここにも友達ができたようで、早めに退職してこっちに住もうかとこの前ママと話していた。うちのパパのよ



うな、行ったり来たりの人もいれば、東京以外に移住しながらテレワークで東京の会社に勤める人もいる。東京の家はまだローンが残っていたけど、民泊に使う業者さんに売って、会社の近くのワンルームマンションに引っ越したので、ちよっと余裕ができたらしい。

私はこっちに来て、大学に入っただけのときに赤ちゃんができた。両親は少し考えたようだが、子供ができたことはとても幸せなこと、家族みんなで育てましょう、と言ってくれて、今は大学に通いながら娘の悠希の子育てをしている。といっても、おじいちゃん、おばあちゃんもいるし、ママも職場が近いし、なにより同じような子がまわりにもけっこういるので、実は思ったより大変ではない。

一昔前は「結婚しなければ子どもを産んではいけない」という風潮があった、私みたいな子は子どもを産めないことが多かったそう。でも、家族がいるのに赤ちゃん一人一緒に育てられないなんて随分おかしい社会だったんだなあと

思う。「だって人口減少で困ってたんでしょ？」とパパに聞いたら、「そうだなあ。だから世の中の方が変わっていったんだろうね。」と言っていた。私たちにとっては、結婚というのはまた別の人生の選択だ。私は、自分と悠希の人生がちゃんと見えなければ、結婚なんて考えられない。

ただ、「一緒に住む人」ということについては、私たちの世代はあまりステレオタイプに型にはめては考えていない。ライフスタイルも人それぞれ、同じように家族の形もさまざま、ママやパパの頃と比べたら本当にダイバースな、多様性のある社会になったんだろう。私はお父さんとお母さんと子どもが一緒に住まなければならない、とは思わないし、シェアハウスで他人と一緒に住んで楽しく過ごす人もいる。人それぞれの選択を社会がゆるく受け入れているのが今の日本で、私たちの世代はそれをとてもしやすいと思っている。悠希と過ごす多くの時間の中で、悠希は父親と一緒に住んでいなくても寂しいとは思っていないのが分かるし、私も悠希の父親に何かしてほしいとは思っていない。ちなみに彼は今、東北のCGデザイナーの専門大学に通っていて、休みに

10 なんと悠希に会いたいというので、年に一、二回くらい三人で出かける感じかな。

私の通う大学は、ホテルパーソンを育成するのに特化した大学だ。サービスマンの作法や基本、サービスマンに必要な主要な外国語、そして観光業のマネジメントや世界のトレンドなどを学ぶ。40代や50代の学生は、一回別の仕事をしたり、ホテル業界で働いた後に、スキルアップや観光分野での起業をしたりするために学び直している。

そもそも小学生の時にやりたいこと、なりたい職業があるような子は、充実した専門学校が各地にあるので、そこに進学する。料理人、パティシエ、あるいは左官やとび職、農林水産業など、多様な学校があつて、基礎的な学業とともに職業人としての専門知識を身に付けることができるので、早ければ16歳くらいからそれなりに働くことができ、その道を極めることができる。飛び級もあるのも、ITや研究職などで若くして成功する人も多い。

11



今の私たちは、長い人生をずっと同じ場所、同じ職業で過ごそうとは思っていない。私もホテルマンとしてある程度極めたら、一回海外に留学なり就職なりしてみても、悠希と一緒に何ができるか考えようと思っっている。

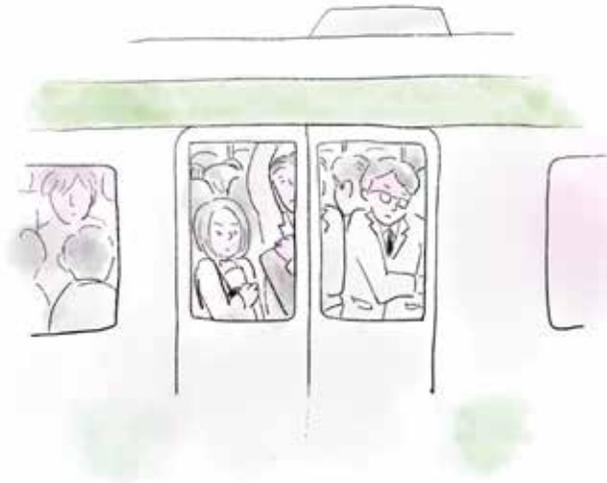
「そんな贅沢、パパの時代には考えられなかったなあ」とパパは笑う。パパの頃は、みんな同じように英語とか国語とか数学とか社会とかをやっつて、その成績が良かったら偏差値の高い大学に行つて、大企業に勤めたりするのが出世コースだったそうさ。「大学では何をやってたの?」と聞いたら、「経済学部だったけど、主にバイトとスキーをしていたよ」。そんなんでよく就職できたもんだなあとは逆にびっくりした。

でももつとびっくりしたのは、「会社では何をやろうと思つたの?」と聞いたら、「会社に入ることが目的で、そこで何をやろうかなんて考えてなかった」と言っていたことだ。だからパパも会社に入ってから、営業もやっつたし、人事も総務もやっつたんだって。それじゃあ、「あなたは何をしている人ですか?」って聞かれたら答えられないじゃん。だからパパは「会社員です」って言つてた

んだって。今はもう、エネルギー関連の輸出入業務っていう得意分野があつて、それを専門にやっているけど、入った当時は自分が何をしてお給料もらつてかわからなかったんだって。それって、ものすごく変な話だよな?

日本にも昔、高度経済成長期があつて、その時は人口が増え続けていたから、とにかくたくさん雇用を作らなきゃいけなかった。だからほとんどの会社が兼職禁止で、家事に専念する専業主婦が税金の面でも優遇されて、シニアの人には定年制があつた。その後2000年に入つたくらいから人口減少が問題になり始めたのに、この高度経済成長期の社会モデルはなかなか変えられず、地方からは人が出ていく一方で、このままだと人がいなくなつて消滅してしまうと言われた町や村がたくさんあつたそうさ。

でも、パパやママの世代は東日本大震災を経験して、お米も野菜も作れない東京に人が集まっていることが良いことだとは思えなくなつたという。緑も水辺も少ない東京で息の詰まるような通勤ラッシュに揉まれ、コンクリートとガ



ラスのオフィスで一日パソコンの前に座って、うつ病などになる人も少なくない中、それぞれがライフスタイルについて真剣に考えるようになり、まだ地方におじいちゃん、おばあちゃんや親戚がいる間に、縁のある地方に行きたい、戻りたい、と思う人が多くなってきた。そこでようやく政府も大きく考え方を変えて、大切なのは一人一人が人生をいろいろ選べることに、自分のやりたいことを見つけてそれを仕事にできるようにすることによって、もっと幸せに生きられるようになることだ、ということだ、あらゆる制度を変えていったのだそう。だから兼職はむしろ奨励されるようになったし、できれば家事は分担したりプロの手を借りたりして女性がいろいろな形で働いてほしいということになったし、定年制なんてなくなった。その代わり、色々な事情で働くことができなくなった人や、そういう人が次の仕事に就くための学びの場は、国や自治体がいろいろな手段でサポートすることになった。

たくさんの人が全国各地に移住しても東京がさびれたりすることは全くな

く、メガシティというかメガロポリスというか、なんだかすごいことになっている。江戸情緒のあるところとか観光名所は地域に住んでいる人が支えてるけど、基本的にはアジアの他の大都市との競争で、MICEや世界的企業の取り合いが続いている。いまや東京には、日本人は半分くらいしかないんじゃないだろうか。それでも治安の良さと、なによりごはんが美味しいのとで、インバウンドの数は、フランスを抜いて世界第一位だ。

医療先進国としてのブランドも確立されていて、検査入院や難病の手術に来る外国のお客様も多い。これは東京だけじゃなくて、その分野に強い地方の大学病院もたくさんあるから、私のめざす地元の高級ホテルには、そういうお客様も来られる。

医療と言えば、つい十数年前までは高齢者の医療や介護の負担が財政を圧迫して大変だという問題があったらしい。しかし全国各地に移住が進み、各地にまんべんなくいろんな世代が住むようになったこともあって、おじいちゃんやおばあちゃんの世代の仕事も増えた。うちの隣のおじいさんは、パワーアシス



トスーツを使って80代でも現役で運送業をやっているし、地域の子供たちの面倒を見るのはシニアの人がほとんどだ。私の友達がお願いしている保育ママも、たしか70歳くらいじゃなかったかな。いまどきはおばあちゃんがエステやネイルの常連で、ママのお客さんも半分は70歳以上。みんな働いて稼いでるから、おしゃれにもお金をかける。そういえば以前は65歳以上を高齢者と言ったそうだが、今は決まってるけど、まあ感覚的には80歳以上かな。あとの人はほとんど現役で働くか、パートタイムで地元の仕事をしているから、年金だけでもらって何もしていない人なんて私の周りにはいない。それがまた、同じように高齢化の問題を抱えた他の国のモデルになっているんだ、とこの前授業で習ったような気がする。日本の国は世界に先駆けて、いくつになっても仕事や生きがいを持ち、自分の能力や個性を最大限活かせる社会を実現した、ということだ。

お医者さんも地方に足りなくて困っていた時代もあったが、今はそもそも地方の大学の方が先端的な研究をしている分野もあるし、手術や難病の診療も5G(注1)やAI(注2)で遠隔でできるから、困ることはあまりない。

(注1) 2020年に実用開始された超高速・大容量の第5世代移動通信システムのこと

(注2) 人工知能のこと

そういう技術が進んだことで、多くの障害のある人も一緒に学んだり働いたりしている。私の同級クラスの女の子も生まれつき耳が不自由だけど、手話通訳という特技があるからホテル業界でも引っぱりだこになるだろうって言われている。あ、ちなみにしゃべったことをすぐに文字に変換するソフトも、文字を音声に変換するソフトもあるから、その子との普段のコミュニケーションは何の支障もないんだけど、シニアの方や外国の方だと手話のほうを通じることがあるから、という特技ね。あと、うちの大学の学長はALS(注3)という難しい病気で寝たきりだけど、分身ロボット(注4)を通じてちゃんと理事会にも出てるんだって。

(注3) 筋萎縮性側索硬化症のこと

(注4) AIを備えたロボットではないが人間が遠隔操作するロボットのこと

(まるで本人がその場にいるように感じられるとされる)

世界にはいろんな国があつて、女性だからというだけで一生涯に閉じ込められたり、肌の色や身分が違うからといって就く職業が制限されたり、賃金が安かったりする。おばあちゃんに話を聞くと、昔は日本でも女性はいろいろアンフェアに扱われて大変だったんだそうだ。今でもセクハラとかパワハラとかあるけど、なんだってほとんど半分の社長や企業幹部が女性だから、一方的にどうこうということがしょっちゅうあるわけじゃない。私もたまに後輩の男の子に「男のくせに」とか言つて怒られたりするから、気を付けないと。

授業が終わったら悠希と一緒に、商店街の中にある遊び場に行く。ここは遊び場という名前で地域のシニアの人が子どもたちを預かってくれる場所だ。お

手玉とかけん玉とか、昔の遊びも教えてくれるし、英語の単語を覚えてくれたり、お話の読み聞かせなんかもしてくれたりする。なにより、いろんな歳の子どもたちが集まっているので、保育園とも家とも違う「遊び場」だから悠希もいつも楽しみにしている。

ここに3時間ほど預けて、私は近くのカフェでアルバイトをする。高校の先輩が開いたお店で、大学で習うホテルマンとしての接客とはまた違う、地元ならではの暖かい雰囲気接客が学べるから、お金ももらえて一石二鳥。先輩は中国語も堪能なので、中国語のネットページも作っているし、中国の観光会社とも提携しているから、中国のお客様もたくさん来る。私もちよつとだけ中国語が話せるようになってきた。ちなみに私たちは、英語の日常会話はふつうにできる。難しい専門用語や構文とかは苦手だけど、会話は小さい頃から英語圏の先生に当たり前に習うし、東京にいた時は街に出れば半分くらいが外国の人だったから、割と自然に身についた。ママは逆なんだって。難しい英語の読み書きはできても、話すのは苦手だって言つた。なんでそうなるのか意味が分

からない。日本語だものすごくしゃべるのに。

私たちが生まれるか生まれなにかくらいの時に、日本はものすごく変わったらしい。だからって私たちに悩みがないわけじゃない。むしろ、小さいときからいろいろな選択肢を与えられている分、小学生の時からたくさん悩んだり迷ったりしてきた。同級生で「俺は寿司職人になる」って言い切って寿司職人の学校に迷いなく進む子とかを見ると、「なんであたしはやりたいことが見つからないんだろう」ってすごく落ち込んだりもした。でも、パパはそんな時、「それも人それぞれ。早く見つける子も、遅くまで見つからない子もいるから、世の中楽しくなるんだよ。パパ達の頃みたいに、みんなが同じように同じ学校に行って、同じような大企業に就職して、30歳になって初めて悩むより、ずっといいよ」って言うってくれて、なんだか楽になった。

私たちは自由だ。自由だからこそ、思い切り悩むし、すごく自分と対話しなきゃいけない。でも自分で決めたことだから、あまり後悔はしなくていい。悠希だって、ダダこねたり泣いたりわめいたりするけど、やっぱりすごく可愛い



し、ホントに生んでよかった、悠希がいてよかったって思う。

世の中には残念ながら、私みたいに家族や環境に恵まれてなくて、せっかく授かった赤ちゃんを自分で育てられない人もいる。でもそれでも、生まれた子はほとんどが子どもが欲しいと望む温かい人に引き取られて、大切に育てられる。普通に男女で結婚している人たちだけは、そういう生みの親に恵まれなかったも、一定の資格要件を満たした人たちは、そういう生みの親に虐待された子がいた、子供を引き取って育ててくれる。だから昔、生みの親に虐待された子がいた、という話を聞くと、かわいそうでならない。そういう子どもがほとんどいなくなったことは、本当に良かったと思う。

バイトを終えて、悠希と一緒に家に帰る。今日はママが遅くなるって言うたから、おばあちゃんと一緒に夕ご飯を作ろう。

「悠希、今日は何が食べたい？」

「はんぱーぐと、おばあちゃんのおしたしー」

「そうだねー、おばあちゃんの菜っ葉のお浸し、おいしいもんね。じゃあ今日はママがハンバーグつくったげる」

「やーたーはんぱーぐー」

山の稜線にかかる夕日が今日もきれい。良いことも悪いこともあるけど、私は今の日本に生まれて本当によかったと思っっている。

悠希の時代には、もっとそう思えるもっと素敵な日本になりますように。

(おわり)

